隠し持つ家

都市に住むことは窮屈だ。
きらびやかな街に溢れる人、人、人。いつでも誰かの気配がそばにあり、落ち着く暇もない。
やっとの思いでたどり着いた住処も、狭い土地にひしめき合って建ち並ぶ家々に埋もれ、今にも窒息しそうである。
都市に住むことは窮屈だ。

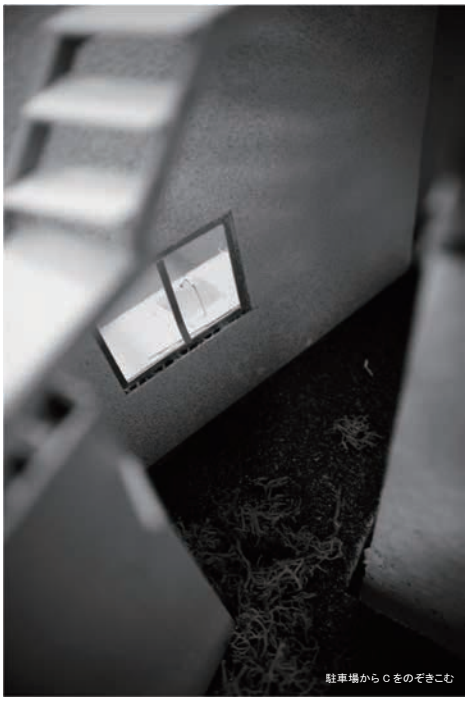
本当に？

目をこらしてみれば、家のすぐ裏に、隣家とのあわいに、家々の屋根の間からわずかにのぞく空に、自分だけが持ちうる居場所を見出せはしないか。
無理して誰かと共有するのでない、自分だけがその価値を認めていればいい、そんな場所を隠し持つことができたとき、生活は、建築は息づいていくはずである。そんな建築がうごめく都市をみてみたいと考えた。

それならば、とそのさまを想像し、設計することにした。



駐車場より空洞に対峙する設計部をみる



駐車場から C をのぞきこむ

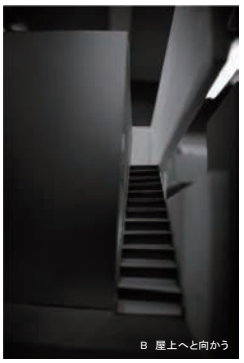


B 玄関から通る視線、 奥に何かある



垣間見える玄関口

about myself
https://www.kokorosuzuki.com/



B 屋上へと向かう

どこまでも内で、どこまでも外

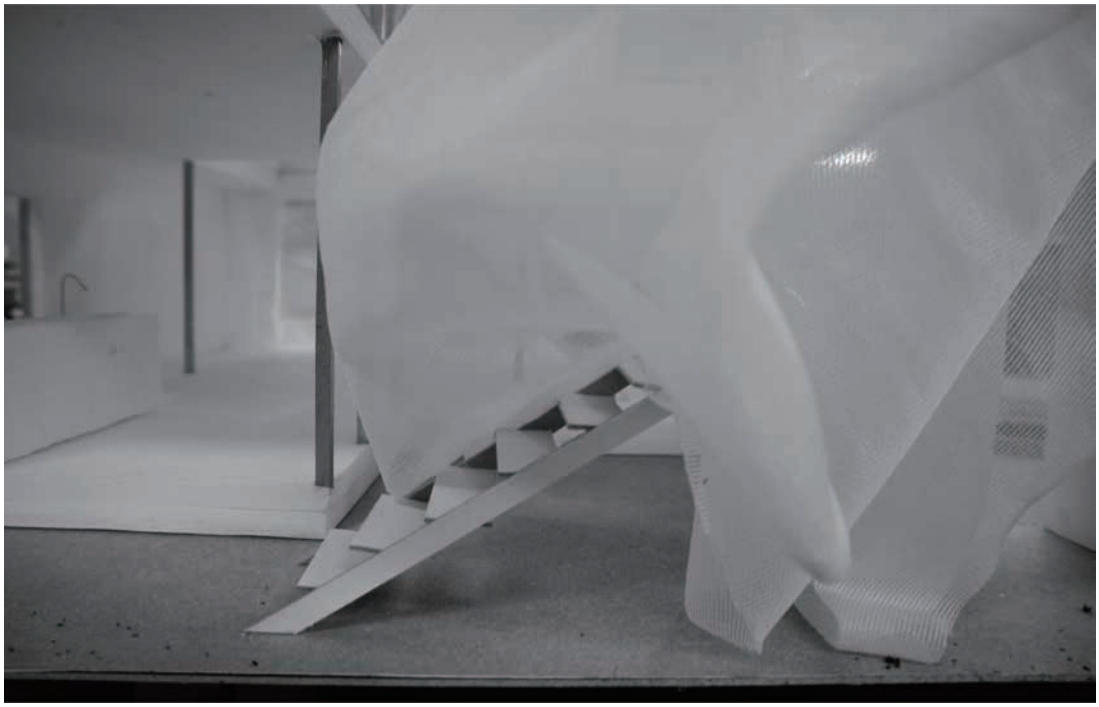




気配を鈍く伝える壁、 細い居場所



玄関部に据えられた風呂場は、 天窓より光を受け輝く



OVERALL PLAN
1:500

LOCATION
Shibuya

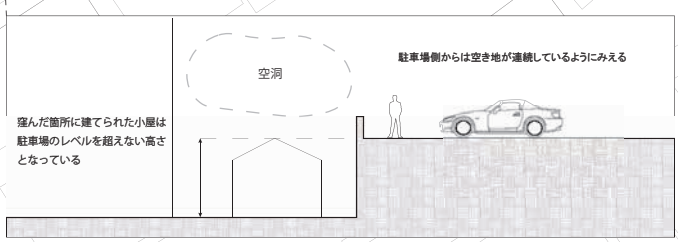
敷地はキャットストリート裏手に広がる、閑静な住宅街のなかの一街区である。
この街区中央部には、『空洞』が横たわる。
旧渋谷川によって形成された、起伏に富んだ地形と、
現状の土地利用との偶然の取り合わせが「浮かんだ」空き地を生み出したのだ。
そこに面する３棟はまだその魅力に気づかず、内に籠もっている。

しかし、やがてその価値を見出していったなら、自らの内に獲得していこうとしたなら、そのさまを想像し、設計を行った。

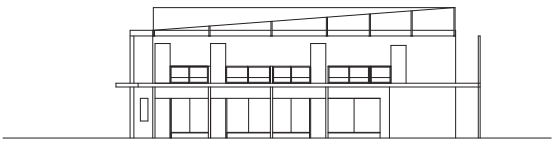
A,B,C は現在、賃貸アパートメント、テナント付き住居、ギャラリー
事務所兼住居であり、今回新しいプログラムの提案は行わない。



ただ、空間と生活の変わりゆく可能性を見つめ続けた。



ELEVATION 1:400

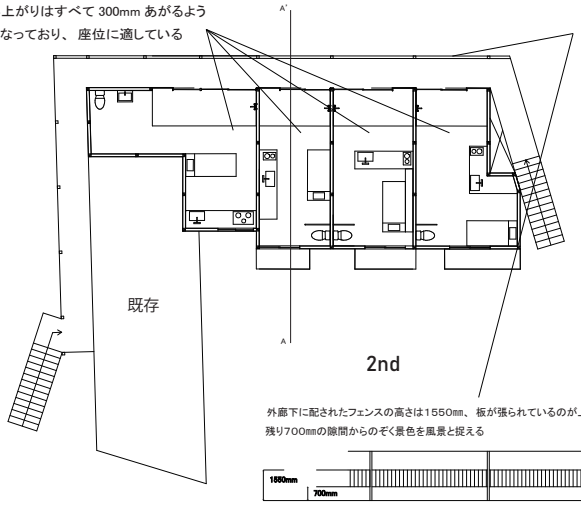


空洞部よりみる



道路側よりみる

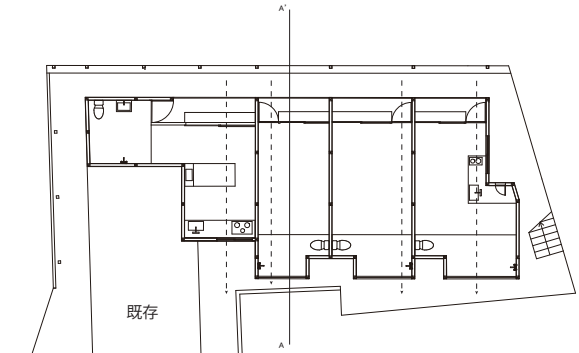
小上がりはすべて 300mm あがるよう
になっており、座位に適している



2nd

外廊下に配されたフェンスの高さは1550㎜、板が張られているのが上部850mm
残り700㎜の隙間からのぞく景色を風景と捉える





1st PLAN 1:300



玄関ドアより奥まで通る視線

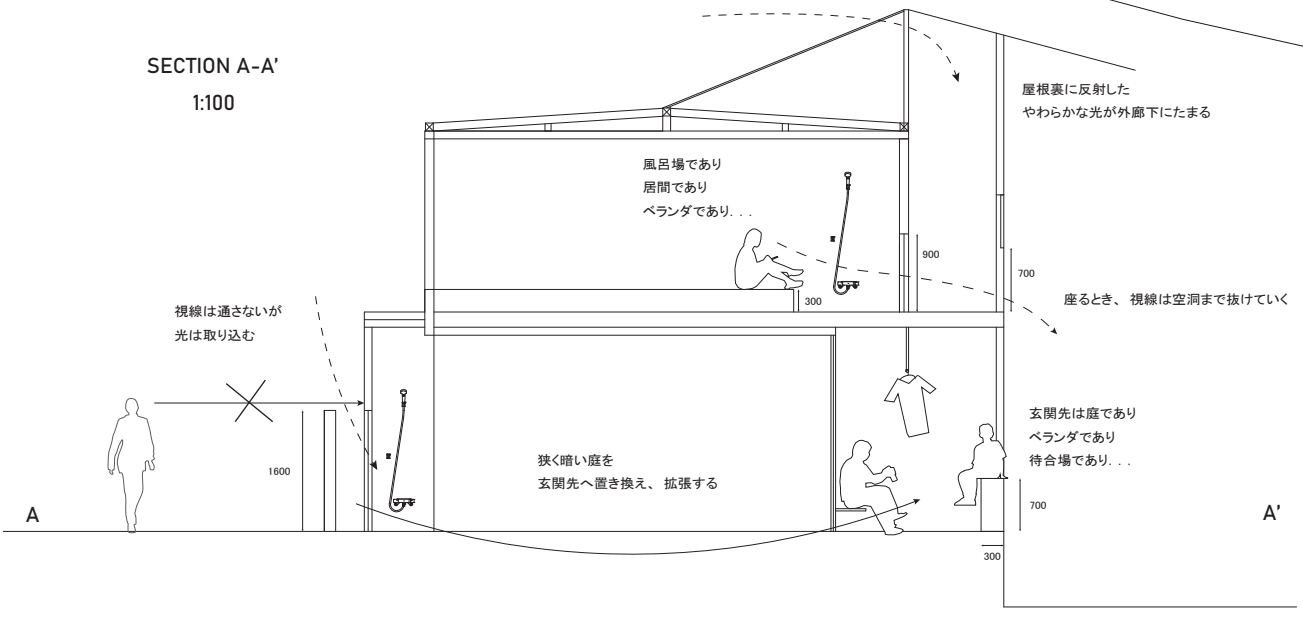
A : 玄関に住む

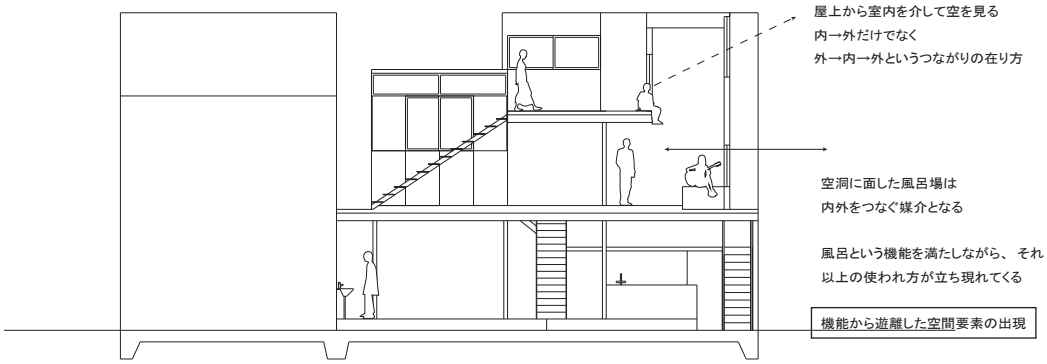
賃貸アパートメントにおいて
靴置きとしての玄関は通常
最小限におさえられる

空洞に価値を見出したとき
玄関が最大の居場所となる

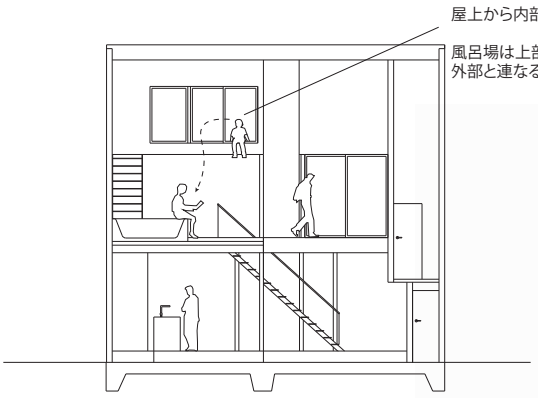
最小の最大化
生活の拠り所が玄関へ移ったなら

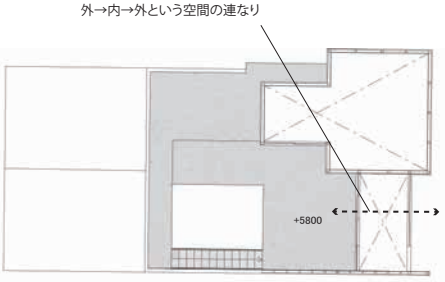
SECTION A-A'
1:100

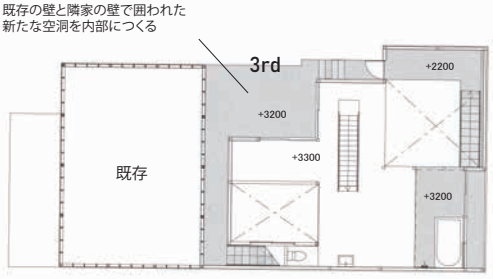




SECTION 1:200







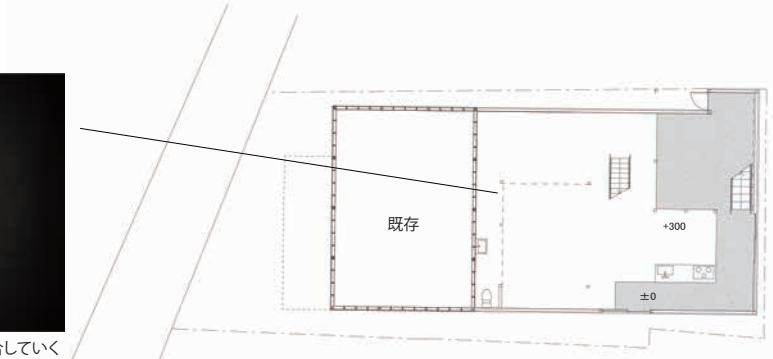
2nd

B : 空洞を孕む

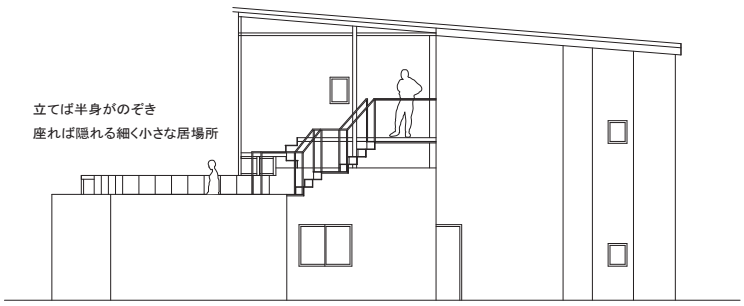
空洞を建築内部に生成するとき
内外は等価にまといつく
どこまでも内であり
どこまでも外であるような空間を
建築は獲得してゆく



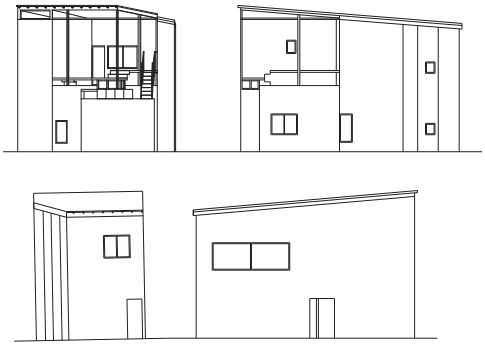
カーテンによって、ゆるやかに空間は分節、接合していく



1st PLAN 1:300



ELEVATION 1:200



OTHER ELEVATION 1:400

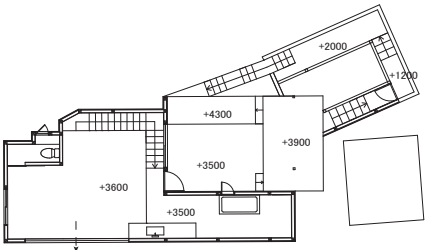
C：空をみる

ただ空をみること
そんな場が家にあること

空洞を介して
生活は空とつながっていく

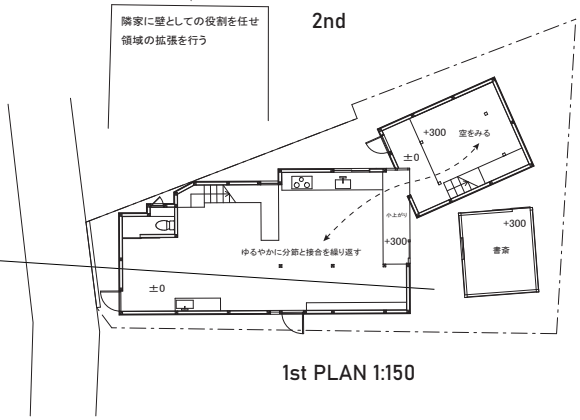


既存の倉庫を書斎に
コンバージョンする



隣家に壁としての役割を任せ
領域の拡張を行う

2nd



1st PLAN 1:150